

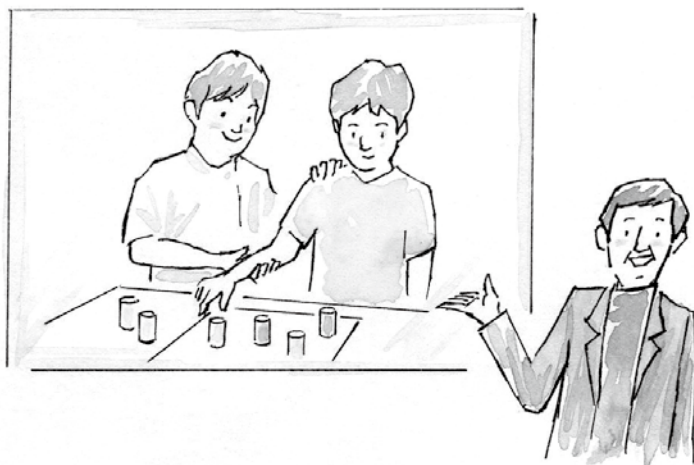


平成30年度から開設する 異分野入門科目 「人間の作業」について

毛束 忠由

Tadayoshi KETSUKA

保健医療学部作業療法学科教授



はじめに

目白大学は平成30年度より、「学部・学科の違いを問わず、本学のすべての学生が4年間の学修を通して共通に獲得することを目指すべき学修成果」である学士力（人間性・社会性・知力・健康・向上心）をめざして教養教育の改革が始まっている（学士力検討委員会（2014））。筆者はその一環として作業療法学科が他の学部・学科の学生を対象とした総合科目の1つである「異分野入門科目」（人間の作業）を担当することになった。

岩槻キャンパス保健医療学部の3学科（理学療法・作業療法・言語聴覚療法）及び看護学部看護学科は、共に

保健衛生学から医療にまたがるスペクトラムの中に位置しており、基礎教育科目および専門基礎は解剖学、生理学、病理学等多くの科目が共通している。その中で異分野入門科目とは、「他学部・他学科の学生を対象に、専門を分かりやすく講義する科目」である。もしそうであるならば「作業療法学概論」を講義することが順当であろう。しかし、「ただし、狭い専門分野に対応する細分化された科目を数多く開設するのではなく、人文学、社会科学、自然科学の各分野に関する大括りの科目群を創出することを目指す」と述べられている。具体例として、「文系学生のための自然科学入門、文系学生のための数学入門や理系学生のための人文学的教養、理系学生のための社会科学入門などが挙げられている（共通科目の在り方検討委員会（2016））。このような例に倣えば、

「保健医療系学生のための生物科学および社会科学的教養」とでもいうべきかもしれない。

国際教養大学学長の鈴木（2017）は教養教育を、「グローバル社会で活躍するのに必要な多様な能力を持った人間を創造するために、これまでの自分を形作ってきた価値観や慣習から一旦自分を自由にし（liberate）、その上で新しい自分を自分で創っていくための学びや芸術（arts）の全人教育」と述べている。一般に教養（liberal arts）とは、専門科目以外の「哲学、歴史、文学、自然科学、語学などを指す（新英和中辞典（1971））が、同時に寛大や自由であるという意味があるように、不確かで曖昧な現象や専門領域の枠を超えて思考したり判断するための豊かな知識や柔軟な態度を意味しているのだろう。

人間を細分化すればするほど曖昧さは減少していくが、全体としての人間はそれぞれの個別的な特徴や歴史を持って生きている複雑な存在である。どのような職種もそうであるが、特に医療職はこのような曖昧で複雑な人間を対象としており、時には人間を細分化して理解したり、患者が示す曖昧さや複雑さに対して知的に挑まなくてはならず、また多くの場合答えのない状態に耐えなければならない。専門的な知識は確定した知識であることが多いが、臨床の持つこのような曖昧さや複雑さに立ち向かうには、やはり教養と呼ばれる柔軟な思考や態度が必要である。

さて以上のことを前提として異分野入門科目「人間の作業」をどのように構成していったら良いのだろうか。筆者もまだまだ準備中ではあるが現在の構想の一端を述べ、今後さらに良い異分野入門科目となるよう読者諸氏のご意見を頂くために現在考えていることを述べたいと思う。

なお、現在の予定は以下の通りである。

講義等の内容：

作業療法は、「人間の作業」を治療の手段や目的としている。人間が生活する上では必ず「作業（Occupation）」を伴うため、人間から作業を切り離して考えることは出来ない。

そこで本講義では、人間が人間としての作業を行える

ようになった特徴を38億年の生命の歴史から俯瞰する。特に進化における人体の構造の変化、人間になるために必要な学習の機能、人間の集団としての社会の機能について学ぶ。さらに、個体の発達、身体とその拡張としての社会、精神の表現等に現れる病理的側面からも学び、広い視点から人間における「作業」を理解できるようになることを目的とする。具体的な授業内容は表1の通りである。

表1 「人間の作業」の授業内容

1. ホモ・サピエンスの特徴①（毛束）
2. ホモ・サピエンスの特徴②（毛束）
3. ヒトの構造と進化①（前島）
4. ヒトの構造と進化②（前島）
5. ヒトの学習と進化①（時田）
6. ヒトの学習と進化②（時田）
7. 人間の社会①コミュニケーション（毛束）
8. 人間の社会②経済（毛束）
9. 人間の社会③法（毛束）
10. 失調する発達①（仲本）
11. 失調する発達②（仲本）
12. 失調する身体①（毛束）
13. 失調する身体②（毛束）
14. 失調する精神①（毛束）
15. 失調する精神②（毛束）

なお、授業内容は変更になる可能性がある（氏名は敬称略）。

目標1. 人間を進化の時間スケールでみる

ホモ・サピエンスの特徴、ヒトの構造と進化、ヒトの学習と進化は、人間を進化の時間スケールで俯瞰する。

さいたま岩槻キャンパスの2学部4学科の学生は卒業後その多くが医療施設や福祉施設で働くことになる。平成26年度の平均在院日数は、病院33.2日、一般診療所17.4日であり平成23年と比較して減少している。もちろん診療科によって異なり、例えば平成26年度の精神科の平均在院日数は281日である（国民衛生の動向2017/2018（2017））。いずれにしても我々医療従事者が患者と接触する時間は限られた時間でしかない。そして退院時の治療目標が主に考慮されることになる。仕事としての診療

行為はそれでも行えるのである。

しかし病気は何の脈絡も無く起こることはまれであろう。もちろん交通事故のような外部からの大きな力が加わったことによる怪我等は別である。多くの病気は、多かれ少なかれ本人の持っている脆弱性に様々なストレスや長期に渡る生活習慣が重なって発症するのである。しかしそれはせいぜい個体の年齢を超えることはない。生まれてから亡くなるまでの約80年間の出来事に過ぎない。

生命の誕生は約38億年前と推計されている。最初の生命がどのようなものであれ、我々の生命もその延長線上にある。そして共通の祖先からサルとヒトに分かれたのが約20万年前である。その後ヒトは進化を続け、認知革命を通して意識や言語を発達させてきた。その結果、ヒトは自然に対する優位性を持つに至り自分自身を「ホモ・サピエンス」と称するようになった。そして現在の人間が存在している。約80年の個体の年齢の前に38億年の歴史を持っているのである。現在の人間（ホモ・サピエンス）の姿形や意識現象はその進化の最先端にあることになる（ユヴァル・ノア・ハラリ（2016））。

本講では、この進化の過程で身体構造がどのように変化して現在のヒトの形になってきたのかを学習する。つづいて認知革命はヒトの学習と関わっている。学習は、意識と感覚と記憶を基盤とする脳の働きである。脳も身体の一部である。身体は遺伝子によって伝えられるが、発達した脳が今度は遺伝子を操作するというのが現在の状況である。ここには多くの倫理的問題が含まれる。

そして生命がこの地球で生存できるのも約50億年後までである。約50億年後には太陽は燃え尽き、地球の生命は終焉を迎えることになる。もちろんだからといってすぐに悲観的になる必要はない。必ず地球が太陽に飲み込まれて無くなるとはいえ、80年の寿命の個体からすると無限に近い先のことである。これから人間は数十年間の間に、自分の細胞から新たな細胞を作り、さらにそれらから臓器を作り出し今までの不治の病を克服できるようになるかもしれない。あるいはAIによるロボットが病気や障害による不自由さをかなり解消してくれるかもしれない。あるいは人工的に遺伝子を操作し、現在のヒト

とは全くその姿形や能力の異なる生物へと変化して行くかもしれない。そのような未来が人間にとって幸せかどうかは保証されてはいないけれども。

このように人間は生物的存在ではあるけれども社会的、歴史的存在でもある。人間（患者）を、治療者として関わる時間（数日から数か月、長くても数年）、個体の寿命としての時間（約80年）からだけではなく、さらに大きな時間スケールから俯瞰することで、新しい人間観が獲得出来るかもしれない。

目標2. 社会の中での人間を考える

人間と社会以降の講義では、社会は人間が作り上げた制度であると同時に社会によって人間が規定されるような相補的なあるいは循環的な関係として考えてみたい。

医療系の中にいると、人間をまず身体的な存在とのみ考えやすい。そしてすべての問題（障害）を身体の問題として捉えるということは自然な発想である（こころの問題は当然脳の問題となる）。しかし、人間が社会的動物であることは論を待たない。それ以上に社会の方こそ人間が作ったものとも言える。

物理学者のバナー（1976）は、知識および経験のこの特殊な部分をphysics（物理学）と呼ぶことが出来るのは、「それが主として人体の感覚・運動装置の延長（または拡張）とでも呼ぶことのできるものを扱っている」からであり、「人間は外界を記録するための感覚器官と外界を変化させるための筋肉機関からなる完全な一組の物理的装置を所有している」と述べている。さらに「食物の消化と体内の代謝活動の維持のためのいっそう精巧な化学装置」をも所有していると述べている。付け加えるならば、世界を認識するための脳と言語による情報化装置を所有していると言えるかもしれない。

ある意味で社会に存在するものは人間の延長だとも言える。人間は、様々な物を生み出して来た。服や家は外界から身を守る皮膚の延長であり、車や工作機械は足や手あるいは筋肉の延長である。様々な化学工業は消化機能の延長であり、コンピューターは感覚器官や脳の延長

であり、インターネットはコミュニケーションの延長である。医療もまた人間の持つ自然治癒力の延長だと考えることができる。逆に人間は社会の様々な働きによって規定されている。言語は人間の思考を統制し、法は否応なく人間の倫理的行動を規制している。

このように人間と社会との関係を相補的、循環的に捉えなおすことで医療職種の持つ身体中心主義を多少でも相対化することが出来るかもしれない。

さいごに

筆者の教員生活で直接教養科目を担当することは初めての経験である。今まで前景にあった専門知識は背景に退き、専門知識を背景から支えていた知識を前面に据える今回の講義は恐怖でもあるが、刺激的でもある。9割は混乱した内容となるだろうけれど、1割くらいは聴講していただく学生に何らかの示唆を与えられることを願っている。

引用・参考文献

バナール (1976)、『人間の拡張』、みすず書房
 学士力検討委員会 (2014)、目白大学における学士力
 国民衛生の動向 2017/2018 (2017)、Vol.64 No.9 p94
 共通科目の在り方検討委員会 (2016)、平成30年度以降の共通
 科目の開設の目的と編成方針について
 鈴木典比古 (2017)、([http://web.aiu.ac.jp/undergraduate/
 message/](http://web.aiu.ac.jp/undergraduate/message/))
 ユヴァル・ノア・ハラリ (2016)、サピエンス全史 (上・下)、
 河出書房